

佐藤たけの(十六才)

下手なほど丁寧さうな田植哉
なく子をば路に境へて田植哉

△日傘

全人

藤園や身動き出来ぬ日傘かな

△更衣

全人

初日には横にもならず衣更
衣更心も共にわたらしく

△短夜

大澤千鶴(十七歳)

短夜や朝けいこうに小言かな

短夜や皿に飯もる給仕人

短夜や直立さるゝ生徒かな

短夜や語り盡さず別れけり

(予は、少女らしくも無き、古句めきたるもの多きを遺憾となす)

雪つぶて

つねを

一、いつか積りし大雪の

庭に戦かふ稚兒等の

よせくる敵はかはくとも

あかさ心のひと筋に

雪のつぶてに骨くたき

氷の刃戟に肉やぶる

二、くろき煙をわけ入りて

向へる敵はさきはらひ

手足は雪にこはるとも

いくさの場にさし立つる

白旗みゆる其れまでは

劔をさめず砲おこな

三、天地はよしや暗くとも

黄金の鵒の光あり

大和男児の生血にて

み雪の色は染めざれと

勇みに勇むつはものゝ

いさほひいとも凄まじや

四、人と生れし甲斐ありて

君のみ前にひかりある

玉と散るとも瓦なし

残りはせじな國のため

進めやすめ諸共に

一歩もあとへは退くな

五、命はかるし義はあもし

さみの御爲めに雄々しくも

勳功を建つるはこの時ぞ

砲の轟きに関のこゑ

聴がて金鵒の勳章に

錦衣かざらん父母の前

俳句披露 (集句二百十章)

題を限つたせいと比較的よい句の集らなかつたの甚だ残念でした御約束の通り天地人の三名に賞を送りました

葉櫻になりて歸るや新夫婦	横濱	まつ	枝子
新築の家や乙鳥も日になるゝ	全	ひ	さ子
投げ込んだ文や櫻の花だより	全	ち	よ子
はるぐと來た振りもなし初燕	全	全	
武威高しいくさに稀れな組元節	埼玉	松	年
酔いさめて寒し日暮の山櫻	千葉	は	な子
見覚えのあるや乙鳥の飛ぶ姿	全	全	
金はかる音には馴れて乙鳥	東京	久	米辰子
咲き満ちて乳や囁さん姥櫻	全		